

★海外文献紹介★

Curious Mind 『好奇心』 — 続き —

“Why Nature” by Gwen Zeichner, *Child Education*, Feb. 1975

“Learning What Children Know” by Margaret Yonemura,

Child Education, Nov./Dec. 1974

“Growing Through Sensitive Listening and Questioning” by

Robert B. Sund, *Child Education*, Nov./Dec. 1974

先月号に引き続き、好奇心についての小論を読み進めてまいりましょう。今回は、さらに具体的な例をとりあげて、好奇心を育てる方向を考えてみることにしました。

もし、まつかさを水の中に入れたらどうなるでしょう。

一九七五年二月号には、“Why Nature”と題して、グエン・ザイヒナー (Gwen Zeichner) という人が、子どもの観察力や知覚を鋭くし、理解を深め、創造性を活発にするために、いかに自然物や生物が大きな役割を果たしてくれるかについて書いています。

そこで、早速筆者も家のガラクタ箱の中にあつた古い乾いたまつかさを、水の入ったガラスのコップの中に入れてみました。するとどうでしょう。本文に書かれているように、四十分後にまつかさは、ほとんど完全に閉じてしまいました。(本文には三十分以内にと書かれている。) このことは、筆者にとつてもひとつの驚きでした。湿ったまつかさを乾いた熱風にあてたら、再びみごとに聞きました。著者は、このような驚きは確かに子どもの興味を引きおこすのに有効であるといえます。

「まつかさの種はどこにあるのでしょうか。いくつか種類のちがうまつかさをふってみて種の大きさや形をくらべてみましょう。種はどうして散るのでしょうか。まつかさの大きさとその

木の大きさと関係があるのでしょうか。・クロマツ、エゾマツ、モミ、ツガの区別ができますか。・山火事によって何かいいことがあるのでしょうか」

以上のような質問は、身近なことであるのにもかかわらず知らずに過ごしていることが多いようです。本文には、その質問に次のような答えが示されています。

「いく種類かの常緑樹の産果は山火事のとときの激しい熱のあと開き、種をまき散らすことがある。まつかさの大きさは必ずしもその木の大きさと関係があるわけではない」

それでは、実際にこのようなことを子どもに教えるにはどうしたらよいのでしょうか。我々は、子どもの生活にとって自然がいかに大切であるか十分承知しているつもりではありますが、その教育法論において必ずしもいつも正しいとはいえません。筆者の知るある植物学者は、子どもの自然教育において最も大切なことはまず身近な自然界に出て行って、実際のものをよく観、それぞれをくらべてみることであるといえます。図鑑やフィルムで代用するのは本末顛倒であるといえます。そして何故かの理由づけをしたり、人間の生活と直接関連づけたりするのは、ずっと後でよいといえます。なぜなら自然界は複雑なしくみになっており、ひとつの現象をみてすぐに結論を出すのは危険であるからです。我々

は自然に対する知識を、教師の口や教科書によってのみ学んだこともありません。そして、時には実際の経験が少ないために、図鑑の方がたよれる存在となっている人もあるでしょう。グエン・ザイヒナーの小論は、筆者の意をも含めたことを必ずしも言い尽くしてはおりませんが、くり返し、自然は子どもの教育においてその可能性に限りがなく、いく種類かの感覚をつかう総合経験になるといって、実際に自然物や生物と出会うことの大切さを力説しています。

次は、一九七四年十一月、十二月号に掲載されている“Learning What Children Know” (by Margaret Yonemura) 及び “Growing Through Sensitive Listening and Questioning” (by Robert B. Sund) という二つの小論を参考に、子どもの話のきき方、ことはかけのし方について考えてみましょう。

最初の小論には、三歳になる子どもとの次のような会話が書かれています。

「ある教師が子どもが「大きい」と「小さい」という意味を理解しているかどうかを知るために、「あなたは大きいキャンディーと小さいキャンディーと、どちらをもらいたいですか？」と彼らに尋ねました。

子ども1は “小さい方” 子ども2は “小さい方” 子ども3は “大きい方” と答えました。もしここで教師がやめてしまったら、彼女はまちがった結論を出してしまったかも知れません。しかし、彼女は子どもたちの発言のものになっている考えを知るために、何故そう考えるかを尋ねてみました。

すると、子ども1からは “なぜって大きいキャンディーを食べると虫歯になるでしょ” 子ども2からは “なぜって大きいキャンディーは口の中に入らないでしょ” 子ども3からは “なぜって大きい方が長持ちするでしょ” という答えを得ました。彼女は、それぞれ三人の子どもが彼らなりの方法で、大きいと小さいという意味の違いを理解していると分かったということです。

そこで著者は、子どもの思考を深く知るためには、一対一を基本として子どもと会話をしなければなりません。そうすることで教師対グループの子どもたちでは発見できなかったことばつかります。記録にはテープレコーダーを使って録音しておくのもひとつの方法でしょう。

子どもに身近な事象について具体的に尋ねてみると、思わぬ子どもの思考の世界を知ることができます。ピアジェはこの方法をとって子どもの世界観を書いたわけですが、我々教師も、日常子どもたちとつっこんだ会話をすることによって、彼らが今どこに

いるかをより詳しく知ることができ、それによって、実際にそれをカリキュラムの中に生かすことができると思えます。

サンド(Sund)の小論は、質問のし方と上手なき方についてであります。例として “影” についての質問がありますので、それをそのまま引用してみよう。

「1 “影” について知っていることをいって下さい」(これは子どもたちからいろいろな反応を期待できるので、非常によい方法である。教師はまず、あることがらについて、子どもがどれだけ知っているかを知る必要がある)

2 “どうしたら影をつくることができますか”(より具体的な質問のしかたではあるが、いくつかの答えを期待できるのでよいきき方である)

3 “自分の考えが正しいかどうか、どうしてわかりますか”(教師は、子どもが証明するために実際の行動を試みる方向に注意をむけている)

4 “影についてどんなことがわかりましたか”(子どもたちはそれぞれ自分のやった結果を、他人のそれとくらべて共通点を見出すので、やや質問の内容をしばった形である)

5 “この学校で、どうやったら巨大な影をつくることができますか”(子どもに創造的な考えを要求するのでよい質問である)

6 “大きな影をつくるのはどうしなければならぬか”(や
や焦点をしぼった質問で、子どもは影をつくるべきことを考
えてみる)

7 “影はどうやったらできるか、一言でいってごらんさい”
(子どもは自分の経験を総合判断して、言葉をつかって表現しな
ければならぬので、「一番最後にする質問としてよい」)

以上の例をとりあげてみたのは、質問のあり方について考えて
みたいと思ったからです。我々はふつう子どもから、単に「は
い」とか「いいえ」という答えを要求することが多いのではない
でしょうか。それらはグループの子どもに一齐に質問するのに便
利ですし、また答えを得るのにそれ程の時間を必要としません。
しかし、著者は子どもに語りかける場合、十分に時間をとって答
えを待つことは、もっと大切なことであるといえます。子どもに
質問をし、子どもが彼らなりに十分考える時間を与えることと、
その結果が単に教師とのフィードバックだけではなく、子ども間
の会話へと広がるのが、上手なきき方であるといえます。

インドのクリスナムルティ(Krishnamurti)という哲学者は、ア
メリカ人のものきき方について次のようにいっているそうです。
「アメリカ人は本当に聞いているのではない。彼らはいつも
聴いたことを判断している」と。これは、たとえば教師の役割を

例にとってみますと、教師は自分の役割を、課題を發展させるこ
とに見いだしているのです、そういうことになるわけです。もし教
師が自分の役割を、人間の発達過程を助けることだと自覚すれ
ば、子ども(人間)にまず焦点をおき、内容はその次になるであ
ろうと著者は説明しています。子どもが話している途中で、教師
が訂正したり中断したりしますと、子どもは自分の考えを先に発
展させることができなくなります。そこで、上手なきき方として
著者がつけ加えていることは、子どもと会話をする場合は、まず
その本人に関心を抱き、彼が話を終わるまで十分に聞くことであ
り、その間に顔の表情や身体でこちらからの反応を示すことも大
切であるといえます。もし子どもがすべて言い終わったら、教師
ひとりがそれに反応するのではなく、他の子どもたちも会話の仲
間入りができるよう、誘ってみる必要があるといっています。

今回は、筆者の興味をひいた二つの観点から、好奇心の発見
とその育て方について限られた論文をもとに考えてみました。
『Childhood Education』の一九七四年十月号から一九七五年二月号
までには、その他様々な角度から好奇心をとらえる小論が掲載さ
れています。

(十文字女子短期大学 江波諄子)